
【習作】ハンター

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【習作】ハンター

【コード】

N1408Z

【作者名】

ロキ

【あらすじ】

習作です。全くの素人が突然思い立って書き始めました。矛盾や間違いが多々あるとは思いますが、どうか温かい目で見守ってください。

感想に対して返事は基本書きません。ご了承ください

01話(前書き)

温かい目で見てください。

01話

「オギヤー、オギヤー」

「捨てられたのか。」

「・・・ならば、お前ももうこの住人だ。面倒だが施設に連れて行くか。」

「確かに渡した。後は任せる。」

「ちっ、わかった。自力で生きていけるようになるまでは育ててやるよ。」

子供が一人でここを生き抜くことはできない。なにを捨てても許される流星街では。

× × × ×

「ハア、ハア」

「走れ！誰がペースを落としていいと言った！」

まだ幼いと言っている子供が太陽の下、道と言えない道をただひたすら走っている。

「ハア、ハア、何時間走らせれば気がすむんですか。」

「まだ半日程度だろが！一日ぐらいは楽に走れるようになれ。」

40歳ほどのオヤジがガラガラの声で怒鳴るように言う。

幼い子供の名前はロキ、怒鳴っている男の名前はハゲル。男は流星街で小さな施設を運営する者だ。施設に子供は一人しかおらず、男と子供の二人暮らしであった。

現在、ハゲルの暇つぶしという名の修行がロキに対して行われている。修行内容は走るなどの基礎体力をつけるものだけである。

「速く走れ！もうすぐ日が暮れるぞ、あと二時間で走り終わらなかつたら飯抜きだ。」

「クッ」

飯抜きという言葉聞いてペースが上がる。すでに体力は限界に近い、それでも4歳の子供としては異常と言っていいだろう

「ハアハア、やっと終わりました。」

「ほら、休んでないで水汲んでこい。きたねえ水汲んできたら飯抜きだぞ。」

「またですか、たまにはハゲルさんが汲んできてくださいよ。」

文句を言いながらもドラム缶を2つ担いで走り出す。ロキももうこの男に何を言っても無駄なことは理解していたし、ご飯を与えてくれていることだけは感謝もしていた。

「相変わらず汚い池です。」

流星街は、なにを捨てても許される場所である。故に産業廃棄物や化学物質など人体に悪影響を及ぼすものが豊富に溢れている。

もちろん水も。雨水でさえ汚れ、飲めたものではない。流星街で死亡する者の大半が毒にやられる。その毒に耐性をつけたものだけが生きられる街だ。

ここは奥に入るほど人が増えていき、独自の議会組織も存在している。建築物もあるがどれも老朽化が進んでいる。

流星街の住人は身元が判別しづらいためマフィアなど犯罪組織が人材を提供している、見返りとしてマフィアは武器や食料などを提供している。

議会はあるが政治はしていないのできれいな水はとても希少だ、故に少しでもきれいな水を求めて水面に浮かぶ油を避け池にもぐる。

ん？何か光りましたか

濁った池の底で何か光った気がした。とりあえず光ったものが何かを確かめに行く。

ナイフがあった。かなり変わった形をしたナイフで、柄に片刃のナイフが2本刺さっているような形だ。

とりあえず持って帰りましょう

池から出てナイフを腰に付け、水を入れたドラム缶を担ぎ走る。

「オギヤー、オギヤー」

「捨てられたのか。」

「・・・ならば、お前ももうこの住人だ。面倒だが施設に連れて行くか。」

「確かに渡した。後は任せる。」

「ちっ、わかった。自力で生きていけるようになるまでは育ててやるよ。」

子供が一人でここを生き抜くことはできない。なにを捨てても許される流星街では。

× × × ×

「ハア、ハア」

「走れ！誰がペースを落とすと言った！」

まだ幼いと言っている子供が太陽の下、道と言えない道をただひたすら走っている。

「ハア、ハア、何時間走らせれば気がすむんですか。」

「まだ半日程度だが！一日ぐらいは楽に走れるようになれ。」

40歳ほどのオヤジがガラガラの声で怒鳴るように言う。

幼い子供の名前はロキ、怒鳴っている男の名前はハゲル。男は流星街で小さな施設を運営する者だ。施設に子供は一人しかおらず、男と子供の二人暮らしであった。

現在、ハゲルの暇つぶしという名の修行がロキに対して行われている。修行内容は走るなどの基礎体力をつけるものだけである。

「速く走れ！もうすぐ日が暮れるぞ、あと二時間で走り終わらなかつたら飯抜きだ。」

「クッ」

飯抜きという言葉聞いてペースが上がる。すでに体力は限界に近い、それでも4歳の子供としては異常と言っているだろうか

「ハアハア、やっと終わりました。」

「ほら、休んでないで水汲んでこい。きたねえ水汲んできたら飯抜

きだぞ。」

「またですか、たまにはあなたが汲んできてください。」

文句を言いながらもドラム缶を2つ担いで走り出す。ロキももうこの男に何を言っても無駄なことは理解していたし、飯を与えてくれていることだけは感謝もしていた。

「相変わらず汚い池です。」

流星街は、なにを捨てても許される場所である。故に産業廃棄物や化学物質など人体に悪影響を及ぼすものが豊富に溢れている。

もちろん水も。雨水でさえ汚れ、飲めたものではない。流星街で死亡する者の大半が毒にやられる。その毒に耐性をつけたものだけが生きられる街だ。

奥に入るほど人が増えていき、独自の議会組織も存在している。建築物もあるがどれも老朽化が進んでいる。

流星街の住人は身元が判別しづらいためマフィアなど犯罪組織に人材を提供している、マフィアは見返りとして武器や食料などを提供している。

もちろん依存しているわけではない。マフィアから攻撃があればそれに対して報復も躊躇なく行う。

議会はあるが政治はしていないのできれいな水はとても希少だ、故に少しでもきれいな水を求めて水面に浮かぶ油を避け池にもぐる。

ん？何か光りましたか

濁った池の底で何かが光った気がした。とりあえず光ったものが何かを確かめに行く。

ナイフがあった。かなり変わった形をした両刃のナイフで、柄に片刃のナイフが2本刺さっているような形だ。

とりあえず持って帰りましょう

池から出てナイフを腰に付け、水を入れたドラム缶を担ぎ走る。

× × × ×

「これはベンズナイフだな。安くても500万ジェニーはするものだ。ベンニー・ドロンという100年くらい前の大量殺人鬼が作ったナイフで、そいつが人を殺す度に記念に作ったナイフだ。その数、288本。」

不味い飯を食べながら、先ほど拾ったナイフについて話す。

「よくそれだけ知っていますね」

「俺も昔は持っていたんだよ。」

売ったときに買ったやつが自慢気に話してくれた。教えてくれたお礼に倍の値段で払わせてやったけどな」

「なるほど、ではこれも売るのですか？」

それだけ高いナイフだ。流星街でも高く売れるでしょう。

「・・・いや、それを手に入れたのも何かの縁だろ。

喜べ！いつものメニューにナイフの捌き方を追加してやろう」

ただでさえ不味いご飯がさらに不味くなりました。

x x x x

「オラオラオラ、走れ、走れ！ペース落ちてるぞ！」

強い太陽の陽射しの下ひたすら走る。すでに半日以上走り続けている。

今から約一年前、意識がはつきりしてきた齢に突然修行が始まった。つらい修行ではあったが毎日自分が成長していることが実感できる。成長していることが実感できれば修行も楽しくなり、ハゲルの言うことをただやるだけという修行から自身を高めるため自己努力する修行ができた。

そして今日から、ナイフを用いての格闘戦闘訓練が始まった。

「まずは、ナイフへの無駄な恐怖心をなくす。ナイフを使う側がナイフに恐怖したら使えないからな。」

ハゲルがナイフを構え、ロキに攻撃してくる。

「ナイフを武器と考えるな、自身の体の一部と考える。ナイフだけに頼った戦い方では簡単に負ける、ナイフをなくしたら終わりだから

らな。あくまでもナイフを主体とした徒手攻撃ができるようにしろ。
ナイフに注視していると死角から拳がくる、それをギリギリでなんとか避ける。

恐怖心をなくすため本当に必要なのか疑問だが、ハゲルは正確に致命傷部位を狙い攻撃してくる。

さらに、ナイフの特性を最大限に生かした動きをし、ナイフに依存せず、ナイフを注視させたくらうで徒手攻撃も繰り出してくる。

こうしてナイフの危険性を理解させ、そして恐怖心をなくしていく。

恐怖心がなくなり、始めてナイフを握った。

ナイフの握り方から始まり、呼吸法、構え方、間合い取り方、歩法、視線と意識の定め方、

視聴覚器官に頼らず気配を感じ取るなどの訓練をしていく。

特に、歩法は興味深かった。構えた状態から足の指だけでの移動法や、闇に紛れるように歩く移動法、暗殺に使う無音の移動法など多岐にわたった。

互いにナイフを持ち、攻防の仕方を反復訓練する。

致命傷部位を狙ったナイフ攻撃を、正確に徒手で捌く。攻撃動作・スピード・間合い・気配等を、体感しそれらに対応した動き・意識を養い、ナイフ・徒手攻撃の両方に対応出来る「意識・技・身体」を形成していく。

そんな日々を送る。

「これはベنزナイフだな。安くても500万ジエニーはするものだ。ベンニー＝ドロンという100年くらい前の大量殺人鬼が作ったナイフで、そいつが人を殺す度に記念に作ったナイフだ。その数、288本。」

不味い飯を食べながら、先ほど拾ったナイフについて話す。

「よくそれだけ知っていますね」

「俺も昔は持っていたんだよ。」

売ったときに買ったやつが自慢気に話してくれた。教えてくれたお礼に倍の値段で払わせてやったけどな」

「なるほど、ではこれも売るのですか？」

それだけ高いナイフだ。流星街でも高く売れるでしょう。

「・・・いや、それを手に入れたのも何かの縁だろ。」

喜べ！いつものメニューにナイフの捌き方を追加してやるっ」

ただでさえ不味いご飯がさらに不味くなりました。

「オラオラオラ、走れ、走れ！ペース落ちてるぞ！」

強い太陽の陽射しの下ひたすら走る。すでに半日走り続けている。

今から約一年前、意識がはっきりしてきた齢に突然修行が始まった。つらい修行ではあったが毎日自分が成長していることが実感できる。成長していることが分かれば修行も楽しくなり、ハゲルの言うことをただやるだけという修行から自身を高めるため自己努力する修行ができた。

そして今日から、ナイフを用いての格闘戦闘訓練が始まった。

「まずは、ナイフへの無駄な恐怖心をなくす。ナイフを使う側がナイフに恐怖したら使えないからな。」

ハゲルがナイフを構え、ロキに攻撃してくる。

「ナイフを武器と考えるな、自身の体の一部と考える。ナイフだけに頼った戦い方では簡単に負ける、ナイフをなくしたら終わりだからな。あくまでもナイフを主体とした徒手攻撃ができるようにしろ。」

ナイフに注視していると死角から拳がくる、それをギリギリでなんとか避ける。

恐怖心をなくすため必要なのか疑問だが、ハゲルは正確に致命傷部位を狙い攻撃してくる。

さらに、ナイフの特性を最大限に生かした動きをし、ナイフに依存せず、ナイフを注視させたうえで徒手攻撃も繰り返し出してくる。

こうしてナイフの危険性を理解させ、そして恐怖心をなくしていく。

恐怖心がなくなり、始めてナイフを握った。

ナイフの握り方から始まり、呼吸法、構え方、間合い取り方、歩法、視線と意識の定め方、

視聴覚器官に頼らず気配を感じ取るなどの訓練をしていく。

特に、歩法は興味深かった。構えた状態から足の指だけでの移動法や、闇に紛れるように歩く移動法、暗殺に使う無音の移動法など多岐にわたった。

互いにナイフを持ち、攻防の仕方を反復訓練する。

致命傷部位を狙ったナイフ攻撃を、正確に徒手で捌く。攻撃動作・スピード・間合い・気配等を、体感しそれらに対応した動き・意識を養い、ナイフ・徒手攻撃の両方に対応出来る「意識・技・身体」を形成していく。

そんな日々を送る。

02話(前書き)

温かく見守ってください

02話

4年の月日がたった。

この4年間、走る、腹筋、背筋、スクワットで基礎体力と筋力をつけ、動体視力、気配の消し方、ナイフ格闘戦闘の訓練をした。時にはハゲルと全力で戦い、時には動物や魔獣の狩りをして修行した。

もうすぐ8歳になる。

今日、男から最後の修行が言い渡される。

「この修行に耐えたら卒業だ。まだまだお前は弱いがこの修行さえ終われば、強くなるための道が開かれる。修行は簡単、俺に殴られる。それだけだ。」

「はい？意味が分かりません。それを避ける修行ですか？」

この反応は当然と言っていいだろう。今まで相当理不尽な要求も大量にあったがここまで単純で意味が分からないものはなかった。

「いや、そのままの意味だ。俺に殴られて生きてたら修行は終了。お前には生き残ることに必要なことはすべて教えたつもりだ、ここを出て好きに生きる。まあ生きていたらの話だが」

「生きていたらですか。まだ意味は分からないのですが、どうせやるのでしょ。悩んでもしかたありません、やってください」

「ふっ、覚悟ができたか。死ぬかもしれないのにここまで早く覚悟ができるのは俺の教育のたまものだな。では」

念を込めた拳をロキに加える。あえて殴ったことに意味はない。

ゴンッ

「よし、精孔は開いてるな。オーラがなくなるまでに『纏』ができるようになれば合格だ。出来なかつたらしょうがない、その程度だったという事だ。安心しろ8年間も一緒に暮らしてきたんだ、墓くらいは建ててやる。」

x x x x

「んっ、あ、頭が・・・」

「おお、起きたか！悪い、強く殴りすぎた。3日も寝てたしな」

寝起きの頭に男のガラガラ声が響く。

ハゲルは明るい声を出しながらも一応心配し、ロキが目覚めたことに安心をしていた。

「生きてたんだ。俺の暇つぶしは終わりだ。しばらくしたらここを出ていけ」

今までの表情は一変し、この男にしては珍しく明るくふざけたような言い方ではなく、真剣で迫力のある声で言う。

「・・・はい、わかりました。」

ではとりあえず、今私が体に纏っているこの生温いものがなんなのか教えてください。どこか力が漲るような感じなのですが。」

「それにすぐ気付くか、天才ってやつは本当にいるんだな。」

わざとらしくヤレヤレといいながら首を左右に振る。

「早く説明してください。」

この訳のわからない状態に苛立ったような声を出す。

「はあ、本当に今さらだが8歳でその丁寧口調は酷いな。育て方を間違いない間違えた。」

まあいい、それはオーラと言うものだ。この世界には一般には存在自体が知られていない念能力というものがある。」

「その念能力を目覚めさせるのに殴ることが必要だったのですか？」

「・・・ああ、その通りだ。」

返答の前に明らかな間があいたような気がするが気にしないでおく。

「お前が3日間、寝てる間これに念について書いて書いてやった。それ読んで念の修行しろ。」

お前はもう一般人としては最強に近いだろう。だが、念能力者と比べればカスのようなものだ。最弱の念能力者でも今のお前よりは強いだろうな」

そういつて10枚ほどの大量の文字が書かれた紙を渡してくる。外見通りの汚い文字だ。

「そこまでの差があるのですか」

「ああ、そこまでだ。念能力者じゃない念能力者は相手にできない。相手にすれば簡単に死ぬぞ、死にたくなければ念の修行をしる、強くなれ。」

「……さあ話は終わりだ。今日はもう休んで数日後にはここを出ていけ。とりあえず天空闘技場に行くといい、あそこなら修行にはピッタリだ。」

× × × ×

「では、行ってきます。」

「おう！帰ってくるなよ。もうおまえの面倒を見るには飽きたからな。」

さて、とりあえずこの紙を読んでみましょうか。

出口に近かったのか流星街からはすぐに出ることができた。近くの町に着き、休むために適当な家の軒先に座り渡された紙を読み始める。

《以下、読まなくても大丈夫です。》

念能力：自らの肉体の精孔という部分からあふれ出る、「オーラ」とよばれる生命エネルギーを、自在に操る能力のこと。

念の基本（四五行）：纏、絶、練、発

纏：オーラが拡散しないように体の周囲にとどめる技術。纏を行うと体が頑丈になり、常人より若さを保つことができる。

絶：全身の精孔を閉じ、自分の体から発散されるオーラを絶つ技術。気配を絶つたり、疲労回復を行うときに用いられる。

練：体内でオーラを練り精孔を一気に開き、通常以上にオーラを生み出す技術。

発：自分のオーラを自在に操る技術。念能力の集大成。必殺技ともいわれる。

念の応用技：応用技は四大行と比べ疲労が激しい。

周：「纏」と「練」の応用技。物にオーラを纏わせる技術。刃物の切れ味を強化するなど、対象物の持つ能力を強化する。

隠：「絶」の応用技。自分のオーラを見えにくくする技術。

凝：「練」の応用技。オーラを体の一部に集め、増幅する技術。オーラを集中させた箇所は攻防力が飛躍的に上昇し、その他身体能力も上がる。

打撃の際に手や足に集中させて威力を増したり、首やみぞおちなどの急所に集中させて致命傷を逃れたりと様々な局面で使われる技術だが、通常ただ「凝」と言う場合は、目に集めてオーラを見ることが意味する。熟練者は「隠」で隠されたオーラをも見ることができ

る。

堅：「纏」「練」の応用技。「練」で増幅したオーラを維持する技術。念での戦いは主に「堅」を維持したまま闘うことになり、これ

が解くと防御力が著しく落ちる。維持する時間を10分間伸ばすだけでも1か月かかると言われている。

円：「纏」「練」の応用技。体の周囲を覆っているオーラを自分を中心に広げ、維持する技術。「円」内部にあるモノの位置や形状を肌で感じ取ることができる。その広さは個々人によって異なり、達人になると50m以上に達する。

硬：「纏」「絶」「練」「発」「凝」を複合した応用技。練ったオーラを全て体の一部に集め、特定の部位の攻撃力・防御力を飛躍的に高める技術。「凝」の発展形とも言える。

流：「凝」の応用技。オーラを体の各部に意識的に振り分ける技術。「凝」は他の部位の攻防力が落ちるのでリスクをとまなう技術である。「凝」を素早く行う技術や、「凝」に使うオーラを必要最低限の量で保つ技術、複数箇所と同時に「凝」を行う技術などが求められる。これらを総称して「流」と呼ぶ。この「流」による攻防力移動は、念能力者同士の戦いにおいて基本であるとともに、奥義でもある。

系統：オーラの使われ方によって6つの系統に分類される。念能力者は例外なくこれらのいずれかの系統に属した性質を持っている。

強化系：モノの持つ働きや力を高める能力。

放出系：通常は自分の体から離れた時点で消えてしまうオーラを、体から離れた状態で維持する技術。

変化系：自分のオーラの性質を変える能力。オーラに何かの形をとらせる技術も変化系に分類される。

操作系：物質や生物を操る能力。

具現化系：オーラを物質化する能力。

特質系：他の5系統に分類できない特殊な能力。血統や特殊な生い立ちによって発現する。

(Wikipediaから引用)

02話(後書き)

念についてはWikiからもってきました。すみません

いかがでしょうか？

アドバイスなどお待ちしております。

03話

さあここからが本番だ。系統を調べるのには水見式というやり方が一般的だ。確か、なんとかかっていう流派から始まったやり方らしいぞ。まあやってみろ

強化系：グラス内の水の量が変化する

放出系：グラス内の水の色が変化する。

変化系：グラス内の水の味が変化する。

操作系：水面に浮かぶ葉っぱが動く。

具現化系：不純物が生成される。

特質系：上記以外の変化が起きる

「特質系ですか」

水見式をやった結果、葉っぱがコップの底に吸い込まれるように消えた。

紙の続きを読む

さて、自分の系統はわかったか？まあなんでもいい、しばらくは関係ないしな。

お前がやるべき修行は、とりあえず1年間、念の4大行を毎日やれ。ついでに、寝る前に全力で限界まで『練』をやれ、そんで寝る。全力でやれよ、これ重要。
簡単だろ？

天空闘技場には、世界中から力自慢どもが大量に集まる。その中で技を磨け、力をつける、経験を得ろ。ついでに、200階までは念の使用は禁止だ。念は一応秘匿するものだからな、200階から念能力者しかいない。力をつけて這い上がれ。

1年過ぎたら系統別の修行だ。お前の系統が何系なのか知らんが自分の系統を中心に万遍なくすべてやれ。修業方法は自分で考えろ、もしくは誰かに聞け。

ついでに、『発』を作れ。自分だけの必殺技だ、自分の系統にあった能力にするのが重要だぞ、一度作ったら変更はできないんだからな。よ～～～く考える。

さて、最後に応用を修行しろ。特に『凝』と『流』、『堅』は絶対に必要だ。出来なきゃ死ぬぞ。

ああ、一応言っておくが間違えるなよ、修業は変えていくんじゃない、増やしていくんだ。

師匠を見つけるといいかもしれないな、まともな師匠ならいろいろアドバイスをしてくれるはずだ。

よし、言いたいことは全部言った。たぶん。別に修行をサボってもいい、誰も見てないし、後悔し死ぬのはお前だからな。ちなみに、読み終わったらこの紙は爆発する。さらばだ！

「最後までふざけたひとですね。・・・爆発もしないですし。

・・・どんなにふざけた人でも、私の師匠はあなただけです。誰の

教えも乞うたりしませんよ」

紙をビリビリに破き、さらに燃やして立ち上がる。むかうは天空闘技場だ。とりあえず、死なない程度には強くなろうと心に誓い、走り出す。

× × × ×

「闘技場はパドキア共和国の南東ですか。まず、ここがどこなのかわかりませんね」

ロキは自身がどこにいるのか理解していない。どの方向に進めばいいのかわからないため、人に聞きながら地道に進もうと決める。

まずはお金を稼がないといけませんね。何をするにも先立つものが必要ですから。

どうでしょうか。てっとり早く稼ぐなら泥棒でもしてしまうのが簡単なのですが。

そう考えながら、歩いていると大きな屋敷が目の前に現れました。これはここで盗めという神のお告げですかね。神など信じていませんが……。

ジリリリリ……

泥棒してきました。予想以上に現金があったのはよかったです。ざっと200万ジェニー、もっと在ったのですがそこまでいららないと思ったのでこれだけでもらってきました。

盗み終わり屋敷を出ると警報が鳴りだしました。もう捕まることはあり得ませんが、どうしてばれたのでしょうか。

まだまだ修行が足りませんね。

では、今度こそ天空闘技場へ向かいましょう。

x x x x

「やっと着きましたか。」

流星街を出てから2週間、ここまでひたすら走り続けてきた。自動車と並走する子供というのはさぞかし不気味だろう。

ここに来るまでにある程度、一般常識というものを学んだと思う。

まず、車と並走する子供は化け物だということ、物の値段、流星街という場所の特異性、ハンターという仕事とその利点と欠点、生活に必要な道具など。

携帯電話とホームコード、電腦コードを手に入れた。流星街出身には個人情報がないので少々余計にお金がかかった。

念の修行はあまりしていません。せいぜい、眠る前に限界まで全力で『練』をするだけでしょう。だいたい1時間ほどやり続けると気絶するように眠ります。というか気絶します。

そして目の前には、今まで見たこともないほどの高さを誇るビルが建っています。街に近づいていくにつれてビルの全体が見えてきま

した、目印になり迷うことなくここまで来られたのはよかったです。上を見ていた視線を下に向けると、天空闘技場に向かって続く人の列ができています。今からあれに並ぶかと思うと辟易します。

約3時間、ともに列に並ぶ男たちに子供は帰れなどの言葉をいただきその言葉を見殺し続けました。自分から人を殺したいと思ったのは初めてかもしれません。

やっと、天空闘技場の受付までやってきた。

「はじめまして。こちらの用紙にお名前と連絡先、武術経験をお書きください」

子ども扱いしないお姉さんに感動しました。

「ありがとうございます」

丁寧な対応に礼を言い、書き始める。名前は口キ、連絡先は先ほど買った携帯電話ビートル07型の番号を、武術経験はナイフを1年と書く。

思ったのだが、今生まれて初めてお礼というものをしたのではないだろうか。

「終わりました。これでよろしいですか？」

用紙をお姉さんに渡し、その用紙をお姉さんがゆっくりと確認していく。

「はい、大丈夫です。では、あなたの番号は2507番です。今日中に少なくとも一試合はありますので準備しておいてください」

お姉さんの指示に従い、選手控え室へ向かう。

× × × ×

『2507番と3001番、第4闘技場へお願いします』

どれほど待ったでしょうか、周りの喧騒を引き裂くようにアナウンスの音が耳に入ってくる。

「やっつとですか、早く終わらせて休ませてほしいものです」

「俺の相手はガキか、こりや楽勝だな！ここは子供の遊び場じゃねえぞ！ママんとこ帰りな！」

「うるさいハゲですね。大声で喋らないでください」

ブチッ！

何かが切れるような音を聞いた気がします。

「いいぜ、ガキ。もちろん死ぬ覚悟はできてんだろ。殺してやるよ！」

ロキはその言葉に反応せず、手でかかってこいと合図を送る。

ロキと挑発に同調するかのように審判が「始め」と言い試合が始まる。

心配の合図とともに、相手が野球の投手のように振りかぶり私に向かって拳を放ってくる。

正直、いくら流星街で鍛えたといっても私がまだ子供であるということを理解していますし、今まで行った戦闘も逃げている相手や、実力を知っている相手だったということも理解しているつもりです。

今のこの試合が初めての实战と言っても過言ではないでしょう。

向かってくるこの拳は、私にこの世界を生き抜いていけるといふ多少の自信と、天空闘技場という場所への多少の失望を与えてくれた。拳をあえてギリギリで避け、後ろに回る。その勢いのまま相手の首に手刀を落とす。

こうして私の初めての实战が終わりました。慢心しないようにしましょう。

審判の方は私のほうを険しい表情で見て悩むように

「君は40階へ行きなさい」

何を考えていたか知りませんが、私が子供だということが加味されたでしょう。

04話

4年がたちました。

今、私は190階にいます。やろうと思えば1年目すぐにも200階へ上がったのですが、順調すぎ修行にならないので両手両足に100キロずつ重りをつけ試合をしています。つけた当初は100階落ちしてしまい大変でした。

念の修行の方も順調です。現在は応用技を修業しています。やはり応用というだけあり難しいです。特に『円』です。今はまだ20メートルが限界です。『流』はシャドーをしながらの修行です。『堅』の持続時間は8時間強、最初と比較すれば驚きの結果です。毎日の積み重ねが大切だと知った今日この頃。

ああそういえば『発』も完成しました。紹介しましょう。

・影の基地（具現化系）

自身の影に念空間を作る能力（入口は自身の影一つだが、出口は複数）

制約は一度行ったことのある日の当たらない場所、または能力を説明し許可を得た人間の影だけしか出口に設定できない。

・影踏み（操作系）

影を踏まれた相手の動きを止める能力

制約は動きを止めている間、1分につき総オーラ量の1〜5%消費です。消費量は相手の力量に依存。

・不器用ナイフ（特質系）

念のみを斬る能力
制約は愛用のベンズナイフでのみ使用可能。

の3つです。さらに念の強さに対して制約が弱い気がしたので強化するための制約として1日の半分、12時間以上太陽の光にあたりと死亡というもの作りました。

この能力は死なないことを前提としています。

応用性は低いですが、なかなかによくできた能力だと思います。

× × × ×

無事、200階に着きました。そろそろ念での戦いを経験したいと思います。

「200階クラスへ、ようこそ。こちらでは199階以下のようにファイトマネーはありません。闘士の方には名誉を求めて戦っていただきます。さらに、200階クラスからはお互いの同意が条件ですが対戦者の指名、さらに3か月間の準備期間が与えられます。登録された場合、199階以下へは行けなくなります。よろしいですか？」

「大丈夫です、登録をお願いします。それと対戦者の指名はしませるので試合を入れてください」

いくつかの視線を感じながら与えられた部屋へ行く。

あの視線の正体はビギナー狙いというやつらでしょうか、いくつかその程度ではないだろう視線も感じたのですが。

与えられた部屋へ入ると、すでにテレビがついていた。

10月21日、225階闘技場ウイングvsロキ

3日後ですか、ずいぶん早く決まりましたね。普段通りの修行をして待ちましょう。

x x x x

さて、待ちに待ちましたよ。ウイング、どのような能力者が楽しみです。どうか私の糧に、経験になるほどの能力者であることを願います。

「皆様お待ちせしました！本日の試合は、200階クラスに来ていまだ負けなし、4戦4勝のウイング選手と、200階クラスでの初試合、ここに来るまで4年かかりました。努力の男ロキ選手との試合です。投票の結果は10：1で、ウイング選手の圧倒的優勢だ！やはり、4戦4勝というデータは有利に働いたのか！ロキ選手は観客の予想を覆せるか！間もなく試合開始です。」

「初めまして。心源流拳法師範代ウイングです。よろしくお願います」

髪はボサボサ、シャツがズボンから出ている、だらしないメガネ男だ。

「流派などに属してはいませんが、ロキと申します。こちらこそよろしくお願います」

お互いあいさつをしていると審判がリングに上がってくる。どうやら始めるようだ。

「試合形式はP&KO制で199階以下のクラスと変わりありませんが、試合時間の制限がなく武器の使用も許可されています。

それでは、両者準備はよろしいですか。では、はじめ！」

わざわざ初試合の私のために説明してくれたのでしょうか。いい人です。

ロキが余計なことを考えているとウイングがかなりの速度で突っ込んできた。

「200階からはある特殊技能が必要です。それを持たないあなたは、申し訳ありませんが出直してきてください」

『堅』で攻撃に備え、『凝』で右手にオーラを集めカウンターをきめる。殴られ、吹き飛びながらもウイングが驚いた顔をするのが面白い

「クリティカル！ロキ2ポイント」

「・・・なるほど、知っていたのですね。まさか、隠しているとは思いませんでした。これからは本気でいきます」

「こちらこそ、騙したようで申し訳ありません。今まで試合では使わなかったので癖になっていました。こちらも本気でいきます」

『凝』で目にオーラを集め、相手の動きに注視する。まずは相手の能力、系統を見極める。

『流』でオーラを移動しながら、ウイングとの殴り合いを始める。殴る手にオーラを集め攻撃し、殴られる場所にオーラを集め防御する。

『流』の修行はしつかりできていたようです。オーラの流れのぎこちなさもなくなることができました。念を使っての初めての实战で少し心配だったのですが。

ロキとウイングの一步も引かない殴り合いはまるで演武のように美しく見える。

もしかして、この人はビギナー狩りなどではなく。純粹に私を心配して、念の洗礼を受けないようにするため態々でてくれたのかもしれませんね。

距離を取り、足を止める。

「……どうかしましたか」

不思議に思ったのか試合中だというのにウイングも足を止める。

「少し聞きたいのですが、あなたは強化系ですか？」

「……普通、自身の系統は軽々しく言うてはいけないのですが、まあその通りです。よくわかりましたね」

「いえ、ただの勘ですよ。……試合が終わりましたら一度、話をしませんか？」

「かまいませんよ。話は終わりでいいですか？では、改めて始めましょう」

そういつてウイングはまたこちらに向かってくる。

ロキははじめて能力を使う。こちらに真っ直ぐ向かってくるウイングの後ろに回り影を踏む。これで、王手です。

能力がばれないように素早く、そして正確にウイングさんの脳を揺らすように顎を殴る。そして目論み通りウイングは気絶し、初めての念を使用した試合が終わった。

「ウイング選手を気絶によるKOとみなし、ロキ選手の勝利！」

「決まったー！TKOだー！ロキ選手、大方の予想を裏切り勝利しましたー！」

強化系に能力はしつかりときくようです。圧倒的な差ではどうなるのかまだわかりませんが。強化系にきくのです、単純な力だけの能力ならば抑えられそうです。いろいろな状況での検証が必要です。

ありがとうございます、ウイングさん。あなたは私にいい経験をくれました。

04話(後書き)

戦闘難しい。無理

05話

「やあ、ロキ君。話を聞きに来たよ」

そういつてウイングさんが部屋にやってきた。

「すみません、態々来ていただいて。話というのはウイングさんが何故私と戦ったのかお聞きしたかったのです。」

私の予想があっているといいですね。別に間違っけていてもどうもしませんが。

「理由かい？簡単だよ、君はまだ念を使えないと思っけていたんだ。君の試合は以前見たことあったからね、ビギナー狩りに君が壊されてしまうのは惜しいと思っけたのさ。だから彼らより先に手を出させてもらった。まあ実際は私よりも強かったけどね」

どうやら私の予想は間違っけていなかったようだ、彼のオーラも嘘はっけていているようには見えません。勘もバカにはできませんね。

「よかつた、あなたは善人のようだ。」

話とは私の念能力をあなたに使う許可をいただきたいのです。私の能力は許可を得ないと使えないので」

「どのような能力か教えてくださいますか？それを聞いて判断します。」

ウイングの話が変わった瞬間、先ほどとは打って変わって真剣な表情をする

「簡単に言えば、私の能力は許可を得た人の影に移動することです。私の影には私専用の部屋がありまして、その出口としてウイングさんの影を利用したいのです。ウイングさんの不利益になるのは、突然私が出てくるかもしれないことだけです。いかがでしょうか、もちろん断っていたいただいても全くかまいません。」

「ふむ、本当に先ほど言った以外の不利益は生じないんですね」

ウイングは真剣な表情を変えず鋭い目つきで、こちらを見極めようと見ている

「はい、私の命にかけて誓いましょう」

急にウイングからの圧力が消え、表情も緩やかになった。

「いいでしょう、許可します。あなたほどの強さを持つ人です、こちらも繋がりを持っておいて損はないですしね。」

「ありがとうございます。これで、私の話は終わりです。感謝の気持ちとして夕飯をおごらせて下さい」

「ふふ、ええ、ごちそうになりましたよ。」

話は変わりますがロキ君はハンター資格を持っていますか？あると便利な資格です。持っていないのでしたら暇なときにでも採ることをお勧めしますよ、あなたなら簡単だ。

ああ最後にもう一つ、まだここで試合をするのならナックルという男とは戦わないことをお勧めします。あれの能力は面倒ですから」

x
x
x
x

ウイングさんとの試合から数十日後、部屋に戻るとまたテレビがついています。

12月1日、225階闘技場ナツクルvsロキ

ウイングさんに夕飯をおごった後、その足で受付へ行き、ナツクルを指名して試合の申請をしました。意外と早く決まったものです。

200階クラスに来てまだ一試合しかしていませんが、そろそろ天空闘技場を出るつもりです。

ウイングさんとの試合で気づきました、ここでは試合はできても殺し合いはできないのだということを。殺しが好きなわけではありませんが、殺し、または殺し合いの中でしか得られないものがあるということが分かりました。

最後に、あのウイングさんが忠告するほどの相手と戦いたくなり指名しました。

x x x x

「ついに今日という日がやってまいりました！本日の試合は、先日大方の予想を裏切り勝利したロキ選手と、フロアマスターへの挑戦権獲得まであと一つ、すでにベテランと言っていいでしょうナツクル選手だー。」

「へっ、態々オレを指名してきたのはこんなガキだったのか、オレも舐められたものだな、コラァァ！ただ、オレに挑戦してきたその心意気だけはかってやろう。」

オレの名はナツクル！バイン、ビーストハンターだ！ガキが態々怪

我しにくることはねえ、手加減してやるからおとなしく帰りな！」

ナツクルは学ランのような服を着て、髪をリーゼントに固めた強面の男だ。

ナツクルの言葉の端々にこちらを舐めているかのような言葉が見受けられる。

「私の名前はロキと言います。私の指名受けていただきありがとうございます。年齢はまだ子供ですが私は本気での戦いを望み、その上で勝つつもりです。負けた時、相手が子供だから油断したと言いつけないようお願いします。試合の方もよろしくお願いします。」

「ああ、わざわざオレを挑発するとはいい度胸だ。よし、最初から本気でやってやるよ。テメエが言ったことだ、後悔すんなよ。」

会話が途切れるのを待っていたのか、話が終わり審判がやってきた。

「P&KO制！時間無制限一本勝負！始め！」

合図とともにナツクルは待ちの構えをとっている。そこに子供だからという油断は全くない。

子供の念能力者は意外にも多い、その中でも戦闘に向く能力者や手練れの能力者ほんのわずかしかない。

しかし、ベテランの能力者は経験上子供でも油断してはいけないことを知っている。ナツクルは間違いなくそれを知っている、相当な実力者だと言っているだろう。

ナツクルは構えたまま動かない。完全に待ちの姿勢だ。状況を進めるためにロキは動く。フェイントを織り交ぜながらナツクルに近づいて行き、間合いに入った瞬間一度フェイントを入れ、脳を揺らして勝つために顎に拳を放つ。

ナツクルはロキの攻撃を予期していたかのように避け、カウンターで拳を放つ。

ロキはその拳を頬に受ける。殴られた衝撃を逃がすため後ろに跳んでダメージを軽減する。

その行動が読めていたのかナツクルは追撃をかけてくる。しかし、ロキはすぐさま体勢を立て直し防御に回る。

お互いが足を止めての殴り合いという形で膠着する。

体術だけならば経験豊富なナツクルが上だろう。

しかし、ロキもナツクルの直線的な動きを見極め引き分けという形に持ち込んでいる。お互いに決定的なダメージを与えることができず拮抗する。

ナツクルはロキの実力を認めたのか雰囲気を変えて距離をとる。ロキもそれを察し、距離を開けたナツクルへの追撃をとりやめ次の行動を警戒する。

警戒していると自ら距離をとったナツクルがこちらに向かってくる。ロキも向かってくる敵を迎えるため、リングの中央に進む。

走る勢いのままお互いの拳がそれぞれの相手に吸い込まれる。ナツクルはロキの顔面に、ロキはナツクルの腹を全力で殴り、お互いが

衝撃でリングの端まで飛ぶ。

若干のダメージを残しながらも立ったロキは、違和感を感じ横へ顔を向ける。

「これがあなたの能力ですか。」

横には、額に数値がある奇妙な生物がいる。

困惑の表情でそれを見ると、ナツクルが不敵な笑みを浮かべながら答える。

「そうだ。ちなみにそいつに攻撃しても無駄だぜ、そいつは無害、故に無敵！少々目障りだがな。」

おまえに俺のオーラを貸す。ちなみに利息はトイチ！10秒1割、雪だるま式に増える。貸出オーラがお前の総オーラ量を上回った時、お前はとぶ」

「とぶ、ですか。とぶとどうなるのですか。」

「ポットクリンがトリタテンに変身。30日間付きまとう、その間強制的に『絶』の状態にする。つまり、30日間完全に念能力が使えなくなる。もう後悔してもオセーぜ。」

「なるほど、ウイングさんが面倒だという理由がよくわかりました。・・・ならば、私が一方的に攻撃できればよいのですね、・・・簡単です。」

そう言い、ロキは一直線にナツクルに向かう。

闘技場という場所は、観客から見えやすいように全方位から選手をライトで照らしている。つまり、影が全方位にある。ロキの能力を使うのにこれほどいい状況はそうないだろう。

ロキはこの試合、始めて能力を使う。

ナツクルはロキの直線的な動きにカウンターを合わせようとしていたのだろう。拳を構えた状態で動きを止め、口すら動かすことができず、目だけで驚きを伝えてくる。

ロキはナツクルのように能力の説明をしない。ただ、動けない敵を殴ることだけを考える。

驚き、戸惑い、痛み、怒り、様々な感情があるだろう。それらはひとつとして口に出すことを許されず、ただ殴られる。

最初の数発だけで返済は完了し、ポットクリンは消えた。それでもロキは殴るのをやめない、ナツクルが死ぬか気絶するまではこの猛攻は止まらないだろう。

まもなく、審判が駆け寄ってくる。

「ナツクル選手、気絶によるKO！ロキ選手の勝利！」

相性ですね。能力の制約で消費するオーラをナツクルの能力が補ってくれた。しかし、体術では負けていました、ナイフを持たない体術も修行しましょう。

x x x x

ナツクルとの試合が終わり部屋で休んでいると、誰かがドアをノックしてきた。

「はい、どちら様ですか」

「すみません、ロキ様でよろしいですか？

私は、バッテリー氏からの使いでナツクル様にあるゲームに参加していただくようお願いしに来たものです。

そのゲームは強いものでしかクリアできないのです。

なので、先ほど試合でナツクル様に勝ったあなたに依頼しに来ました。

クリア報酬は500億です。どうぞしょう受けていただけないでしょうか

「ぜひ、やらせて下さい」

05話(後書き)

ストック終了

グリードアイランドで生まれたという設定はどうだろう。意外とあり得るのではないだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1408z/>

【習作】ハンター

2011年12月9日01時02分発行